

『看聞日記』応永二十八年(一四二一) 六月十五日条

○庶民が多数亡くなったことに対して大光明寺(伏見宮家菩提寺)で施餓鬼、また庶民が勧進して五山以下の寺々でも施餓鬼。

天文五年(一五三六) 七月天文法華の乱

八月十九日、戦亡施食を清水寺で修する。乱後すぐに施餓鬼。

おわりに

室町時代における戦死者慰霊方法としての施餓鬼の隆盛。鎮魂の機能が期待され、盆行事としても定着し年中行事化。

江戸の笑いと死——安永期小咄本の死生観——

大村 哲夫

現代日本人に見られる宗教意識・行動の特徴の一つは、特定の宗教は信仰しないが墓参や初詣など寺社への参詣は欠かさないことといわれる。こうした一見矛盾する宗教観や宗教行動はどのようにして形成されたのであろうか。筆者は宗教心理学の観点から、こうした日本人の宗教行動や宗教性(個人を超越した存在や問題への合理性に捉れない態度)が、死を目前とした終末期の死の受容や災害など危機の受け止めなどに当たって、無意識の中に大きな影響を与えていることに注目してきた。そこでそうした宗教観や宗教性の源流を尋ねて近世庶民の死生観を探ろうとすると、それが殊の外困難であることに気付かされる。為政者や宗教者と異なり、庶民には自らの思想を表明する機会が少なかったからである。

そこで筆者は江戸期の笑話、安永期小咄(こぼなし)本に注目した。小咄は、一、江戸において出版された『鹿の子餅』

(木室卯雲一七七二)を流行の魁として、天明の饑饉や寛政の改革で終焉するまでのおよそ十年間に限定して行われた笑話のジャンルであること、二、「多く対話で咄を進め、余韻を後に残す会話止めでサゲており、省力を重んじた簡潔さが目立つ」(武藤禎夫一九八七)として他の地域・時代の笑話と区別できること、三、小咄は庶民のなかで製作され、庶民が楽しんだものであり、「笑う」という行為には著者(編者)と読者の間に価値観の共有が不可欠であり、当時の死生観が反映されていると考えられるからである。

筆者は一七七二—一七八一年に江戸で出版された小咄本五十三冊に収録された二八四三話の小咄を対象に分類・分析を行った。その結果、江戸小咄において死をテーマとした話は全体の一〇・五%にみられた。死の話のうち殺人に関わる話題が三〇・二%と最も多くなっている。これは現代人の感覚から見ると、笑話という性格の文芸としては高い割合を示していると考えられるが、からりと仕上げられており悲劇性は感じられない。次いで自死、臨終・死、寿命、死後世界や靈魂に関わる話が多くみられた。自死の原因は、経済的行詰まりなど現代と共通するものもあるが、異なるものもある。例えば現代では、原因・動機のうち「健康問題」が最も多く、自死者全体の約半数となっている(警察庁二〇一一)が、小咄の中には「健康問題」は全く見られなかった。その反面、自死のうち三一・〇%が「心中」であるなど、男女の相対死の割合が多くなっており、禁断の恋愛に死ぬ当時の美学が反映されているとも考えられる。長寿を願う心情に基づく話も多く、「長寿≡幸福」と一般的に受け止め

られていたことが窺われる。医療や科学が進歩し長寿を実現した現代にあつて、かえつて「健康問題」を動機として死を選ぶという現実には、現代社会の皮肉な矛盾を感じざるをえない。また一例のみだが、他人に迷惑を掛けずに死にたいという願望通りに「頓死」した話もあり、これは現代のピンピンコロリ信仰などにつながる心性であると考えられる。死後世界や霊魂に関わる話が、死の話の一七・四%を示すことから、小咄が創作文芸であることを考慮しても、当時の江戸庶民の心性が死者やあの世に対して親和的であつたことをうかがい知ることができる。

これらのことから十八世紀後半の江戸庶民の死生観は、長寿という幸福を願っていたこと、しかし経済的あるいは面目が立たないなど人生に行詰まつた場合は、死を選ぶもやむなしとするなど、生と死の間の関は低く、死への親和性は高かつたことが推測できる。

地蔵盆と両墓制——兵庫県豊岡市竹野町の事例——

清水 邦彦

両墓制を残す兵庫県豊岡市竹野町須谷の地蔵盆を分析することを手掛かりに、地蔵盆が先祖供養かどうかを考察する。竹野町の地蔵盆を取り上げる理由は、以下の通りである。滋賀県の大森恵子は、地蔵に捧げる盛り物の分析から「地蔵盆は祖霊祭でもあつただろう」と述べた。調査対象地域が異なるとはいえ、両者の結論は一八〇度異なる、この疑問を持って、二〇一

〇年及び一一年八月下旬の土・日曜日、京都の地蔵盆調査を行った。地蔵に捧げる供物が盆供と同様である点を除けば、京都の地蔵盆に於いて、先祖供養の要素は皆無であつた。京都の地蔵盆は、子供を遊ばせることを主眼とする。

二〇一一年八月二三日、大森の調査地域の一つである、兵庫県豊岡市竹野町竹野に赴いたが、地蔵盆を行っている気配が一切感じられなかった。地元の方にお聞きしたところ、「現在、竹野では地蔵盆に特別なことは行わない。ただ墓参りをするだけである」とのことだつた。そこで竹野字上町にある竹野浜自治会の共同墓地に赴いたところ、墓参りの方が散見し、入口のお堂に立つ地蔵にはたくさんのお供物が捧げられていた。墓参りの方にお聞きしたところ、「これは地蔵盆であり、先祖供養である」とのことだつた。しかし、疑問は残る。竹野では地蔵盆に先立つ八月十五日に仏送りが行われるからである。

そこで二〇一二年八月二三日、竹野町須谷の地蔵盆を調査した。須谷の地蔵盆は、下の地蔵・車堂の地蔵・埋葬墓地への道の入口にある六地藏・埋葬墓地入口にある地蔵・石塔墓地のある円通寺（臨済宗）・院森神社向かいにある地蔵堂の六箇所を家族で回り、地蔵に供物を捧げるものである。埋葬墓地は、西谷と書いて、「ニシングダニ」と呼ばれる。地蔵盆の際、埋葬墓地には入らない。逆に、お盆の際には、埋葬墓地に供物が捧げられ、入口の地蔵には供物を捧げない。石塔墓は「ラントウ」と呼ばれる。ラントウにも地蔵盆の際には供物を捧げない。地元の方は、「地蔵盆は先祖供養である」と云っていたが、単純に学術用語として先祖供養と云ってしまつて良いか疑問が残る。